

……倭国大乱（一八〇年代中頃）に関わる人物の足跡……

- 伊弉諾 — … (人質) 少童 (海神) 三神、筒男 (住吉) 三神、海神本家筋宗女、^{おおやまつみ}大山祇宗女、^{くらおかみ}闇 籠ら
 … (主家嫡子) ^{わたつみ}向津姫 (天照大御神→ヒミコ)、^{わたつみ}豊受 (天照) 皇太神 (天照大神)、^{わたつみ}素戔嗚 (天王)
- 伊弉冉 — … (実子) ^{ひるこ}日子 (蛭児、^{えびす}蛭子、^{あめのことしろぬし}天之事代主)、^{ほのかぐつち}火軻遇突智 (火産靈)
- 伊弉冉 — … (養女) ^{おおげつひめ}大宜都比売、^{はにやま}埴山姫 (大宜都比売、^{おおげつひめ}大気津比売、^{にゅうつひめ}丹生都比売)、^{みずはのめ}罔象女 (丹生都比売)、
 (伊弉冉分身) ^{くくり}菊理媛 (白山神) / ^{わかむすび}稚産靈 (稚日女、^{わかひるめ}丹生都比売)

〔天照大御神〕 <呼称の変遷> ^{わかむすび}向津姫 → ^{わかひるめ}若日女 → 天照大御神 (天照大靈女) → 日神 → 倭の女王 ^{おおひるめむち}ヒミコ (大靈女貴、
 蔽之御魂天疎向津媛) → 天照大御神

<足跡> 倭奴国王朝六代天神、天之尾張の宗女向津姫として怡土井原の天宮で誕生 → 伊弉諾養女 → 若日女 → 大乱 → 天照大御神 → 高千穂宮に都して高天 (日高 + 天之国) 再興。天照大靈女の名で夫天照大神を水天神として祭祀 → 高千穂宮に天宮して七代天神日神に就任。稚産靈を分身稚日女に起用 → 纏向に遷座 → 倭の女王ヒミコ → 瀬織津姫 (天照大神分身、天照大神荒魂) を分身 (蔽之御魂天疎向津媛、天照大御神荒魂) に起用 → 纏向に都して天 (蔽) 之国王朝 (倭) 再現 → 女王を降り、笠縫邑に遷座。天照大御神に戻る → 天照大神御靈、天照大 (御) 神荒魂を奉じて倭姫ともども伊勢国五十鈴の川上に遷座 → 天照大神の再来をひたすら祈願 → 崩御後、箸墓古墳円形部に埋葬

〔豊受 (天照) 皇太神〕 <呼称の変遷> 天竺マガダ国大王 → 天台山山王 → 山王、牛頭天王、神皇産靈、佐太大神、大穴持、大国主 → 月神・月読、熊野櫛御気野、御饌津神 → 豊受 (天照) 皇太神 → 天叢雲、天照大神、八柱の雷、水天神、八俣大蛇・小蛇、倭大物主、豊受大神 → 高皇産靈 → 天照大神

<足跡> 天竺マガダ国王子として誕生 → マガダ国大王 → 江南の天台山山王 → 島根半島に飛来して山王、牛頭天王、神皇産靈、佐太大神、大穴持、大国主、豊葦原中つ国王 → 伊弉諾に養子入りして月神・月読、熊野櫛御気野 (熊野権現)、御饌津神 → 瀬織津姫を妃に娶り、分身に起用 → 向津姫に婿入り。豊受 (天照) 皇太神 → 一八〇年代中頃、義父伊弉諾に謀反 → 大乱 → 唐古に都する邪馬台国

建国→天叢雲、水天神天照大神、大蛇・小蛇、倭大物主、豊受大神→奥出雲で素戔嗚一党に襲われ、丹後に逃走（通称、八俣大蛇）→日神に大政奉還誓約→高千穂宮に赴任して高皇産霊と語り、葦原中つ国平定→大倭に帰国→天照大神とも高皇産霊とも語る→伊弉諾夫妻の大喪、纏向宮造営、所造天下、日高見国建国に奔走→葛城山東麓の高天で逝去。纏向石塚古墳に埋葬

<祭祀する神社>伊雑宮、籠神社奥宮の眞名井神社

〔伊雑（いざわ）宮〕（三重県志摩市磯部町）、皇大神宮（内宮）別宮で、主祭神は天照大（御）神御魂、相殿に玉柱屋姫命（伊佐波登美神）を祀る。『皇大神宮儀式帳』では、祭神は天照大神御魂。

古くから、天照大神の遙宮と呼ばれてきた。伊雑宮の御師西岡家の文書には、「祭神の玉柱姫（玉柱屋姫）は里に座す天照大神分身、瀬織津姫は河に座す天照大神分身」とあるそうな。

〔籠（この）神社〕（京都府宮津市）、主祭神は、彦火明命。相殿に豊受大神、天照大神、海神など四柱を祀る。眞名井原に鎮座する奥宮（眞名井神社）は神代の鎮座地とされ、豊受大神と天照（皇）大神を祀ってきた。

〔籠（この）神社奥宮の眞名井（まない）神社〕（宮津市江尻）、社殿背後の左右に磐座二座が鎮座して、右側の磐座主座（本宮）祭神は豊受大神、相殿神は罔象女命、彦火火出見尊、神代五代神。左の磐座西座祭神は天照（皇）大神。社伝によると、外宮に祀られている豊受大神は、神代に眞名井原に鎮座していたという。垂仁天皇御世、眞名井原の匏宮（与佐宮、与謝宮）に鎮座する天照（皇）大神が伊勢国五十鈴の川上（内宮の地）に遷座したことで、元伊勢と呼ばれてきた。

〔瀬織津姫〕<呼称の変遷>玉柱（屋）姫→天照大神妃、天照大神分身（天照大神荒魂）→祓戸の神→ヒミコ分身（巖之御魂天疎向津媛、天照大御神荒魂）

大祓詞に登場する祓戸四柱の神（祓い清めの神）の一神で、水神。『倭姫命世記』や『伊勢二所皇太神宮御鎮座伝記』に、「皇太神宮荒魂、一名は瀬織津比咩神」、「天照荒魂、亦の名は瀬織津比咩神」とあるそうな。『中臣祓訓解』も「大祓詞」に登場する瀬織津比咩について、「伊弉諾の禊払いに登場するマガ津日神であり、天照太神荒魂」と伝える。

<足跡>伊雑宮の玉柱（屋）姫→天照大神妃、天照大神分身→東軍女大将として広田国に布陣→伊弉諾の禊払い時の監察役（祓戸の神、祓い清めの神）→天照大神亡き後、ヒミコ分身→女王ヒミコと一心同体となって鬼道を操り、祭政一致に邁進→逝去後、纏向ケノ山古墳に埋葬

<祭祀する神社>廣田神社、荒祭宮

「神功紀」、「天照大神（大御神）、誨えまつりて曰わく、『我が荒魂（天照大御神荒魂、巖御魂天疎向津媛）をば皇后に近くべからず、当に御心を広田国に居らしむべし』とのたまう」

〔廣田神社〕（西宮市）、主祭神は、天照大御神荒御魂（撞賢木巖之御魂天疎向津媛命）。

〔内宮第一別宮 荒祭宮〕、祭神は、天照坐皇大御神荒御魂。正宮北に鎮まる荒祭宮は、かつて正宮西隣りに鎮座して、儀式全てが正宮に準じて斎行されたという。

〔素戔嗚〕<呼称の変遷>素戔嗚→大国主→熊野櫛御氣野→射楯神、兵主→大兵主、牛頭天王、天王

<足跡>向津姫の弟→高千穂宮に寓居→天照大御神の水天神祭祀・水天神に捧げる新嘗祭準備に立腹して狼藉→新羅に出奔→奥出雲に潜入→八俣大蛇退治→天狗山北麓の熊野（熊野大社の地）に居住して熊野櫛御氣野僭称→豊葦原中つ国再建に奮闘するも挫折→天照大御神と共に纏向宮入り→天照大御神、倭女王ヒミコに即位。ヒミコ率いる天（巖）之国王朝（倭）の射楯神、兵主に就任→大兵主、牛頭天王、天王に昇進→ヒミ亡き後、内部抗争→東播神出に隠遁

<祭祀する神社>須我神社、熊野大社、八坂神社、神出神社

〔須我（すが）神社〕（雲南市大東町須賀）、主祭神は、須佐之男命、稲田比売、清之湯山主三名狭漏彦八嶋野命（大己貴命）。素戔嗚が大蛇を退治した後、移り住んだ宮殿跡に建てられたという。これが日本で初めて造られた宮殿とされ、日本初之宮と呼ばれてきた。

〔熊野大社〕（松江市八雲町熊野）、天狗山北麓に鎮座して、櫛御氣野命（伊弉諾の真名子）を素戔嗚命として祀るが、櫛御氣野命を素戔嗚命とする確たる根拠はないらしい。

〔八坂神社〕（京都市東山区）、中御座に牛頭天王として素戔嗚命、東御座に櫛稲田姫命を祀る。神仏分離令以前は、感神院、祇園社、祇園天神、祇園牛頭天王社と称してきた。神社の創祀について

は諸説がある。斉明天皇二年（六五六年）、高麗より来朝した使節の伊利之が新羅の牛頭山に坐す素戔鳴尊を山城国愛宕郡八坂郷に勧請したと伝わる。

〔**雌岡**（めっこ）**山に鎮まる神出神社**〕（神戸市西区）、祭神は、素戔鳴尊、櫛稲田姫命、大己貴命。社伝によると、「雌岡山に降臨した素戔鳴命（牛頭天王）・奇稲田姫命の二神、葉草を採取して住民の病苦を救い、禁厭を教えて災厄を祓い、農耕を指導奨励して生活の安定を図った」という。

〔**日隈の伊弉諾**〕〈呼称の変遷〉伊弉諾→日の神？→**伊弉諾大神**

〈足跡〉日隈家嫡子として誕生→日隈家統領→七代倭（奴）国王→七代天神から東方統治立て直しを拜命→畿内攻略準備→オノコロ島・丹後宮津・摂津石屋邑（神戸市東部）に仮宮や拠点を構築→妃伊弉冉、摂津石屋邑で八柱雷（八俣大蛇、三輪大物主率いるオロチ精鋭）に拉致→伊弉諾軍、伊弉冉分身で西軍女大将菊理媛率いる軍団が石屋邑に殺到→大乱勃発→菊理媛も伊弉冉も出雲に拉致→伊弉諾軍、出雲闇見国（月夜見の黄泉国）で三輪大物主率いるオロチ連合軍と決戦→伊弉諾、大敗。北九州を席卷され、熊襲に敗走→日向国あわき原で禊払い（敗戦の儀式）→向津姫と共に高千穂郷に移住→伊弉諾大神として近江多賀に移住→淡路多賀の幽宮で崩御

〈祭祀する神社〉多賀大社、伊弉諾神宮

〔**多賀大社**〕（滋賀県犬神郡多賀町）、祭神は伊邪那岐大神、伊邪那美大神の二神。

〔**伊弉諾神宮**〕（淡路市多賀）、祭神は松を神木と崇める伊弉諾大神、伊弉冉大神。通称、幽宮。

〔**伊弉冉**〕〈呼称の変遷〉伊弉冉→月神→**伊弉冉大神**

〈足跡〉闇見国王女→闇見国女王、月神→伊弉諾妃→摂津石屋邑で八柱雷に拉致→大乱勃発→出雲闇見国に拉致→伊弉冉大神→熊野有馬邑に移住後、花窟で逝去

〔**花窟**（はなのいわや）**神社**〕（三重県熊野市有馬町）、伊弉冉尊、軻遇突智尊を祀るが社殿はない。明治期以前までは墓所とされ、熊野灘に面した高さ四五^尺の巨岩を御神体としてきた。

〔**日子**〕〈呼称の変遷〉日子→**蛭児**（「記」では**水蛭児**）→天之事代主、蛭子

「伊弉諾紀」、「次に蛭児を生む。三歳になるまで脚猶し立たず。故、天磐櫛樟船に載せて、風の順に放ち棄つ」

「伊邪那岐記」、「くみどを興して生める子は、水蛭児。この子は、葦船に入れて流し去てき」
 <足跡>淡路島で伊弉諾・伊弉冉夫妻の嫡子日子として誕生→幼少期、東播舞子（神戸市垂水区）で成長→大乱→父と共に日向落ち→蛭児→大山祇の後見・警護の下、三輪氏に人質として護送→天之事代主の名でヒミコのお告げを伝達。蛭子の名で国々の市振興に尽力→八重事代主が後継
 <祭祀する神社>柳原蛭子神社、西宮神社、今宮戎神社、石津太神社

〔**大山祇神社**〕（今治市大三島町）、祭神は楠を神木と崇める大山積神、別名三島大明神、和多志（渡し）大神。境内の大楠は、樹齢二六〇〇年だそうな。

〔**柳原蛭子神社**（神戸市兵庫区、祭神は蛭子大神）と**西宮神社**（西宮市、祭神は蛭児命）の縁起〕、「蛭子は楠船に乗って淡海島（大三島）から兵庫の和田岬に上陸し、後に西宮に遷った」。

〔**今宮戎神社**〕（大阪市浪速区）、祭神は天照皇大神、事代主命ら五神。

〔**石津太**（いわつた）**神社**〕（堺市）、祭神は蛭子命、八重事代主命、天穗日命。縁起に、「当地に蛭子が上陸した。大倭王孝昭天皇以来、蛭子を祀る。当社は日本一古い蛭子神社」とあるそうな。

〔**三輪恵比須神社**〕（奈良県桜井市三輪）、祭神は八重事代主命、八尋熊罴命ら。市場の守護神、日本最初の市場の神、神託を司る神として崇敬されてきた。

〔**火軻遇突智**（「記」では迦具土）〕<呼称の変遷>火軻遇突智→**火産霊**

『古事記』、「伊邪那岐命、はかせる十拳剣を抜きてその子迦具土神の首を斬りたまいき。・・・」
 →迦具土は伊弉諾の叱責を恐れて広田国に逃げ込み、火産霊の名で生きのびた。

<足跡>伊弉諾次男→幼少期、東播垂水邑で成長→摂津石屋邑で伊弉冉拉致に関与→大乱→父の叱責を恐れて広田国に逃亡→山背国北部に居住→火産霊の名で火伏・防火の指南に尽力
 <祭祀する神社>愛宕神社

〔**愛宕**（あたご）**神社**〕（京都府亀岡市千歳町）、祭神は伊邪那美尊、火産霊命（加具突智神）、大国

主命。当社の分霊が後世に和気清麿により、愛宕山山頂の朝日峰に遷されたという。古来、火伏・火難除けの神社として崇敬されてきた。

〔**愛宕神社**〕(京都市右京区)、祭神は、伊弉冉尊、埴山姫神、天熊人命、稚産霊神、豊受姫命。全国に九千社ある愛宕神社の総本山。火伏や防火に霊験のある神社として一際名高い。

〔菊理媛〕

〈足跡〉白山神の娘→伊弉冉養女→伊弉冉分身→大乱時、西軍女大将として敏馬浦(神戸市灘区)に奇襲上陸し、伊弉冉救出に奔走するも、捕虜となる→伊弉冉と共に出雲闇見国(月夜見の黄泉国)に拉致→大乱後、帰国して白山の神の名跡を継承。

〈祭祀する神社〉白山比咩神社

〔**白山比咩**(しらやまひめ) **神社**〕(石川県白山市)、霊峰白山を御神体とする全国白山神社の総本山で、創祀は二千百年以上前とされる。別名、白山権現。祭神は、白山比咩大神(菊理媛尊)、伊弉冉尊、伊弉冉尊。中世以前、神道としての白山権現は、伊弉冉尊とされてきた。

〔**稚産霊**〕〈呼称の変遷〉稚産霊→稚日女→丹生都比売(稚日女)

『日本書紀』、「稚日女尊、斎機殿に坐しまして、神之御服織りたまう。・・稚日女尊、乃ち驚きたまいて、機より墜ちて、持たせる梭かひを以て体を傷らしめて、神退りましぬ」
→邪馬台国に引き抜かれ、稚日女、丹生都比売やぶの名で生きのびた。

「神功紀」、「皇后、吉日を選びて、斎宮に入りて、親ら神主と為りたまう。・・『先の日に天皇に教えたまいしは誰の神ぞ。願わくは其の名をば知らむ』ともうす。七日七夜にいたりて、答えて曰わく、『神風の伊勢国の百伝う度逢泉の拆鈴五十鈴宮に所居す神、名は撞賢木巖御魂天疎向津媛命』と。亦問いもうさく、『この神を除きて復神有すや』と。答えて曰わく、幡荻穂に出し吾や、尾田の吾田節の淡郡に所居る神(伊射波神社の祀る稚日女)有り』と」

「稚日女尊（日神分身）、誨えまつりて曰わく、『吾は活田長峽国に居らむとす』とのたまう」

<足跡>豊葦原中つ国中興の祖・巖香来雷の娘→伊弉冉養女→大乱時、西軍女将として生田の森（神戸市中央区）に布陣→大宜津比売・罔象女ともども阿波国に退却後、高天に参集→日神分身の稚日女→邪馬台国に引き抜かれて丹生都比売襲名→丹生都比売の束ね役→丹生都比売神社辺りに居住→天火明に仕え、農耕殖産の旗振り役、醸造増産、雨乞い神事の指導に奔走→天火明謀反→天火明と共に纏向宮を脱出。東都に向かう途上の志摩国淡郡で病死

<祭祀する神社>丹生都比売神社、伊射波神社、生田神社

〔丹生都比売（にゅうつひめ）神社〕（和歌山県伊都郡かつらぎ町）、第一殿祭神は丹生都比売大神（稚日女）、第二殿祭神は高野御子大神（丹生都比売の御子）、第三殿祭神は大食都比売大神、第四殿祭神は市杵島比売大神。丹生都比売は高野御子と共に諸国を巡歴し、人々のために農耕殖産（衣食の道・織物の道）の道を教え導き、紀伊国菅川藤代峯（海南市藤白）に天降った後、天野の地に鎮座した。以来、不老長寿、農業・養蚕・織物の守り神とされてきた。

〔伊射波（いざわ）神社〕（三重県鳥羽市安楽島）、祭神は、稚日女尊、伊射波登美尊、配神は玉柱屋姫命、狭依姫（市杵島姫）命。創祀は定かでないが、千五百～千六百年以上の歴史があるという。

「諸国一の宮」によると、稚日女尊を海の道から加布良古崎に祭祀したのが創祀とされ、古来、志摩国の海上守護神として崇敬されてきた。狭依姫は市杵島姫の別名。

さらに同書は、志摩市磯部町から鳥羽市安楽島町にかけての地は、粟嶋と呼ばれたと伝える。

〔生田（いくた）神社〕（神戸市中央区）、祭神は、稚日女尊。いつの頃か、北の布引山（砂山）に鎮座していたが、七九九年の大水害で山麓が崩れたため、現鎮座地の生田の森に移ったと伝わる。

〔大宜都比売〕

「伊邪那岐記」、「伊豫の二名島は、身一つにして面四つあり。・・粟国は大宜津比売と謂い、」『古事記』、「（速須佐之男命、）食物を大気津比売神に乞いき。・・速須佐之男命、その態を立ち伺いて、穢汚して奉進るとおもいて、その大宜津比売神を殺しき」→大宜津比売神を襲名した

埴山姫は天照大神に引き抜かれて、大気津比売、丹生都比売、埴山姫の名で生きた。

『古事記』に「粟国（阿波国）を大宜都比売といい、・・・」とある大宜都比売は、伊弉諾期に生きた女性。一宮神社の祀る大宜都比売は、この一～二代後の素戔鳴と同世代の姫。よって、埴山姫は大宜都比売（一宮神社祭神）を襲名し、大宜都比売、大気津比売と語ったと見た次第だ。

<足跡>阿波国大宜都比売の宗女→大宜都比売襲名→大乱時、西軍副将として生田川旧河口に奇襲上陸し、埴山姫を拘束→埴山姫・罔象女・稚産霊ともども阿波国に退却→埴山姫に名跡を禅譲

<祭祀する神社>一宮神社

〔一宮神社〕（徳島市一宮町）、祭神は大宜都比売命、天石門別八倉比売命。往古より、一宮大明神として崇敬された古社。

〔埴山姫〕 <呼称の変遷>埴山姫→丹生都比売→大宜津比売→大気津比売→丹生都比売→埴山姫

<足跡>伊勢国多気町丹生で誕生した埴山姫→丹生都比売→伊弉冉養女→大乱→東軍の瀬織津姫旗下に走り、副将として生田川沿いに布陣→大宜津比売に捕まる→大宜津比売・罔象女・稚産霊ともども阿波国に退却後、大宜津比売襲名→高天に参集→大気津比売と改名→素戔鳴の御饌津神→邪馬台国に引き抜かれて天火明に仕え、丹生都比売に戻る→丹生都比売の東ね役→稚産霊・罔象女に丹生都比売の名跡を禅譲。埴山姫に戻る→天火明と共に東都に移り、殖産興業に奔走→？

<祭祀する神社>丹生神社、上一宮大栗神社、丹生都比売神社第三殿、愛宕神社

〔丹生（にゅう）神社〕（三重県多気郡勢和村大字丹生）、主祭神は丹生都比売ではなく、埴山姫。

松阪市南方の多気郡多気町に、丹生という農村があり、そこに丹生神宮寺（丹生の弘法大師堂）、埴山姫を祭る丹生神社が並び建っている。唐から帰国した空海は、諸国を巡歴して真言密教を広める聖地を伊勢国丹生と定めたが、唐から投げた三鈷が丹生都比売（稚日女）を祀る丹生都比売神社神領の高野山で発見されたことで、高野山が真言宗の拠点になったという。

〔上一宮大栗（おおあわ）神社〕（徳島県名西郡神山町）、祭神は、大宜都比売命。伊勢国丹生の郷（三重県多気郡）で丹生都比売と貴ばれた埴山姫は、八柱の供神を率いて神馬にまたがり、阿波国に遷

られ、その地で大宜都比売を襲名して国土を経営し、粟を蒔いて広められたという。

〔罔象女〕

〈足跡〉?→伊弉冉養女→大乱時、西軍女将として敏馬浜に奇襲上陸し、摂津石屋邑や都賀川西岸に展開→大宜津比売ともども阿波国に退却後、高天に参集?→邪馬台国に引き抜かれて丹生都比売襲名→稚日女と共に丹生都比売の束ね役→天火明に仕え、農耕殖産の旗振り役、醸造増産、雨乞い神事の指導に奔走→天火明謀反→丹生川上神社中社辺りに隠遁

〈祭祀する神社〉敏馬神社、丹生川上神社中社、貴船神社

〔敏馬 (みぬめ) 神社〕(神戸市灘区)、主祭神は素戔鳴尊、天照皇大神、熊野坐神。本来の祭神は、美奴売神・敏馬神だったらしい。ちなみに、境内の水の宮祭神は弥津波能売(罔象女)神、奥宮祭神は伊邪那岐大神と伊邪那美大神。いつの頃からか、縁切りの神とされてきた。

〔丹生川上神社中社〕(奈良県吉野郡東吉野村)、祭神は、罔象女神。磐余彦は夢に顕れた天神の教えに従い、古来、巖一門が尊んできたこの聖地で巖香来雷や罔象女ら御霊を祀った。

〔貴船 (きふね) 神社〕(京都市左京区鞍馬貴船町)、祭神は、高竈神、闇竈神、罔象女神。

大乱前後、海神本家は太氏と海神が合体した大海神、邪馬台国に組した海神大神、伊弉諾と共に熊襲に逃げた海神本家や女系の海神本家筋、日向で分家を建てる海神(少童)三神に分裂して相戦ったが、神武東征以降、敗北した海神大神はお家断絶または海神三神祭祀を強いられた。

住吉大神と住吉(筒男)三神に割れた住吉族も、同じ運命を辿った。大乱中に邪馬台国旗下に走り、旧領安堵された大山祇一門は、西と東で態度が異なった。早々と東征軍に組した伊予大三島勢は勢力を増したが、徹底抗戦した伊豆三島勢は執拗に追尾され、伊豆諸島に逃げ込む羽目に陥った。東征軍になじめず、日和見に徹した摂津三嶋鴨勢は、後世、勢いが振るわなかった。

〔筒男三神〕〈家系の変遷〉住吉本家の人質三児→筒男三神→?→住之江住吉大神家を後継

〈足跡〉住吉本家が伊弉諾に差し出した人質三児→禊払い後、筒男三家創設→日向国あわき原に西

海一の水軍砦を構築→末裔が一族もろとも日向を引き払い、神武東征に参軍→神功の新羅遠征を主導→摂津住之江の住吉大神家を住吉三神に祀り替えて後継

<祭祀する神社>住吉神社、本住吉神社、住吉大社

〔住吉神社〕(宮崎市塩路)、祭神は住吉三神。境内に阿波岐原(塩路に隣接)を含む社地を所有してきた。全国に数ある住吉神社の元宮として、元の字を丸で囲った社紋を代々受け継いできた。

〔住吉神社〕(福岡市博多区住吉)、祭神は、筒男ら住吉三神。配神は、天照皇大神、神功皇后。

〔本住吉神社〕(神戸市東灘区)、主祭神は底筒男神。配神は、中筒男神・表筒男神(住吉三神)、神功皇后、天児屋根命、大山津見命。

〔住吉大社〕(大阪市住吉区)、全国にある住吉神社の総本社。祭神は、筒男三神、息長足姫命。

〔住吉神社〕(兵庫県明石市魚住町)、祭神は、筒男三神、息長足姫命。

住吉大社に伝わる「住吉大社神代記」によると、摂津住之江の住吉大神が「播磨の国に渡り住みたい。藤の枝の流れ着く所に祀れ」と神宣したことで、播磨に勧請されたという。

☆神功は住之江を制圧すると、住之江で祀られてきた住吉大神を播磨に追っ払ったわけだ。

〔海神本家筋〕<家系の変遷>海神本家の宗女→女系の海神本家筋→豊玉姫→?→対馬の海神本家継承

<足跡>海神本家が伊弉諾に差し出した人質の宗女→豊国の豊玉彦を婿に取り、海神本家筋創設→宗女豊玉姫(ワニ族の姫)が火火出見に嫁入り。火火出見の外戚→末裔が一族もろとも日向を引き払い、神武東征に参軍→神功の新羅遠征を主導→対馬の海神本家継承

<祭祀する神社>和多都美神社、海神神社

〔和多都美(わたつみ)神社〕(長崎県対馬市豊玉町仁位)、仁位浅茅湾際に鎮座して古くから渡海宮と称し、彦火火出見尊、豊玉姫命、渡海大明神を祀ってきた。

同社には、次の竜宮伝説が伝わる。「神功皇后が三韓征伐に向かう際、かじ取りを勤めた安曇磯羅は、竜宮に住む海神から潮の満ち引きを操る潮満珠・潮干珠を借り受け、神功に献上した」

〔**海神**（かいじん）**神社**〕（対馬市峰町木坂）、祭神は、彦火火出見尊、豊玉姫命。豊玉姫は、豊玉彦の娘で神武天皇の祖母にあたる。同社には、次の縁起が伝わっている。

「神功が新羅凱旋の帰途、当地に旗八流を納めた因縁から、当社は八幡本宮と号した」

〔**少童三神**〕〈家系の変遷〉海神本家の人質三児→少童三神→？→志賀島の海神家後継

〈足跡〉海神本家が伊弉諾に差し出した人質三児→禊払い後、少童三家創設→末裔が一族もろとも日向を引き払い、神武東征に参軍→神功の新羅遠征を主導→志賀島の海神家後継

〈祭祀する神社〉志賀海神社、海神社

〔**志賀海**（しかうみ、しかかい）**神社**〕（福岡市東区志賀島）、祭神は海神三神。創祀者は新羅遠征から凱旋した安曇磯良（邪馬台国旗下にあった時は、安曇磯羅）。

〔**海**（わたつみ）**神社**〕（神戸市垂水区）、主祭神は海神三神。配神は大日靈貴尊。神功皇后が凱旋の帰途、この地で海神三神を祀ったことに始まるという。神社境内の入り口に石造の鳥居、一〇〇（北）南の海際に朱塗りの大鳥居が建っており、大鳥居を通して友ヶ島の一つ、沖ノ島が遠望できる。

〔**女神大山祇**〕〈家系の変遷〉大山祇の宗女→女神大山祇→木花開耶姫→？→富士山麓の大山祇家後継

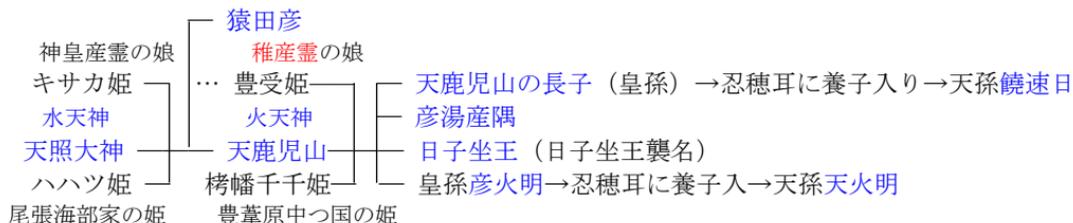
〈足跡〉大山祇が伊弉諾に差し出した人質の宗女→伊弉諾の児塩土を婿に取り、女神大山祇家創設→宗女の木花開耶姫が火瓊瓊杵に嫁入り。火瓊瓊杵の外戚→末裔が一族もろとも日向を引き払い、神武東征を主導→富士山麓の大山祇家を木花之佐久夜毘売に祀り替えて後継

〈祭祀する神社〉富士山本宮浅間大社

〔**富士山本宮浅間大社**〕（静岡県三島市）、祭神は、木花之佐久夜毘売命。富士山頂に奥宮（祭神は木花之佐久夜毘売命）がある。

〔**三嶋大社**〕（静岡県三島市）、三島市の中心部（国府のあった伊豆国賀茂郡）に鎮座して、大山祇命、積羽八重事代主神を祀る。幕末までの祭神は、大山祇命。三嶋の神（御島神）は伊豆諸島の開拓神とされ、噴火を繰り返す伊豆諸島の人々から厚く崇敬されてきた。往古、伊豆諸島の賀茂郡三島郷から伊豆国府の現社地に遷座したとする説もある。

……素戔嗚の八俣大蛇退治（一九〇年頃）に関わる人物の足跡……



〔天鹿兒山〕＜呼称の変遷＞天羽羽→天鹿兒山、八柱の雷→火天神

＜火天神の天璽＞天鹿兒弓、天羽羽矢（丹塗り矢）＝火天神の御子の印し〔火瓊瓊杵（→火火出見→磐余彦）、饒速日、小蛇の大物主（火明饒速日）、天稚彦、日子坐王（→賀茂別雷）らが保有〕

「神武紀」、「皇師遂に長スネ彦を撃つ。・・天皇の曰わく、『・・汝が君とする所、実に天神の子ならば、必ず表物^{しろしもの}有らむ。相示^みせよ』とのたまう。長スネ彦、即ち饒速日命の天羽羽矢一隻及び歩鞞を取りて、天皇に示せ奉る。天皇、覽して曰わく、『事不虚なり』とのたまいて、還りて所御の天羽羽矢一隻及び歩鞞を長スネ彦に賜示う。

＜足跡＞天照大神と尾張海部家ハハツ命（和珥臣遠祖）の妹ハハツ姫との間に誕生した嫡子天羽羽→大乱→中国地方・北九州を席卷→葦原中つ国、丹後海部家を共に統治し、天鹿兒山と語る→火天神に就任→奥出雲で素戔嗚一党に襲われ、落命（通称、八俣大蛇）

〔豊受姫〕＜呼称の変遷＞豊受姫→豊受大神

＜足跡＞稚産霊の宗女として誕生→豊受（天照）皇太神の養女→豊受姫→天鹿兒山に嫁入り。饒速日を生む→大蛇退治の際、母子共捕えられて高千穂宮に護送→天照大御神の身の周り世話役→天孫火瓊瓊杵（火天神に移籍）の吾田降臨に随伴→丹後海部家に里帰り後、豊受大神祭祀

〔饒速日〕＜呼称の変遷＞皇孫饒速日→天孫饒速日

<足跡>天鹿兒山と豊受姫の間に誕生した嫡子→大蛇退治の際、生け捕られて高千穂宮に護送→天照大御神に入籍。天孫饒速日→大倭降臨→一年後、急逝

〔彦火明〕 <呼称の変遷>皇孫彦火明→天孫天火明（少彦名）

「大祓の詞」、「大倭日高見国を安国と定め奉りて、・・皇御孫命の端の御殿仕え奉りて」

『古事記』、「大穴牟遲（葦原色許男、大己貴）と少名毘古那（天火明）と、二柱の神相並ばして、この国を作り堅めたまいき。然て後は、その少名毘古那神は、常世国に渡りましき」

『日本書紀』、「少彦名命、行きて熊野の御碕に至りて、遂に常世郷（常陸国）に適しぬ。亦曰わく、淡島（友ヶ島群島の淡島？志摩国粟嶋？）に至りて粟茎^{とこよのくに}に縁りしかば、はじかれ渡りまして常世郷に適しぬ」

<足跡>天鹿兒山と栲幡千千姫の兄→大蛇退治の際、捕虜→高千穂宮に護送→天照大御神に入籍→天孫天火明→大倭天降り→日高見国建国→尾張海部家統治→関東・常陸・陸奥を席卷して千葉県市原市惣社に東都開設→東都以北に日高見国を国替え→ヒミコに謀反→常陸・陸奥に逃亡→？

<祭祀する神社>真清田神社、加太淡島神社、潮御崎神社

〔真清田（ますみだ）神社〕（愛知県一宮市真清田）、祭神は、天火明命。

境内由緒に、「祭神天火明命は、天孫瓊瓊杵の御兄神に坐しまし国土開拓、産業守護の神として御神徳弥高く、尾張国はもとより中部日本今日の隆昌を御招来遊ばされた貴い神様」とあるそうな。

〔加太淡島（かだあわしま）神社〕（和歌山市加太）、祭神は、大己貴命、少彦名命、息長足姫命。

神代の昔、加太沖に浮かぶ友ヶ島諸島の神島（淡島）に大己貴命・少彦名命の祠が祀られていたが、友ヶ島に狩りで来島した仁徳天皇が対岸の加太に社を造営して、遷し奉ったのが淡島神社の始まりとされる。

〔潮御崎神社〕（和歌山東牟婁郡串本町潮岬）、祭神は、少彦名命。「記紀」にある熊野御碕は少彦名命が常世国に渡り給うた聖地で、景行期に御崎の静之窟内に勧請したことに始まるという。